

丹頂鶴の生息する村、そのものずばりの『鶴居村』の「鶴見台」「鶴居・伊藤サンクチュアリ」で、丹頂鶴の求愛ダンスと給餌風景そして貴婦人の如きツンとすました容姿、見事な滑空着地を見て、感動した。最高の天気誘われて、3 時間賭けてかけて丹頂鶴に会いに行きました。

1 タンチョウは、瑞鳥とも言われ、アイヌの人々には、サルルンカムイ（湿原の神様）と敬われてきた。留鳥として道東の湿地に生息していたが、乱獲により、明治の末には絶滅したといわれていた。

2 官民挙げての保護活動の成果、現在では数百羽！

雪の多い冬には餓死したり事故死することが多かったので、昭和 37(1962)年から、下雪裡小学校の児童等による餌付けと観察が 10 年余り行われ、同小学校の廃校に伴い、隣接する渡部さん夫妻に餌付けが引き継がれ、現在では、「鶴見台」として整備された。ここは丹頂を観察出来る最もメジャーなスポットとなっている。

3 カメラの砲列（放列）に圧倒される！

鶴居・伊藤サンクチュアリでは、午後の 2 時に給餌を行うと聞いたので、早めに赴いた。既に 20 組近いカメラマンが所狭しと陣取っていた。更に、観光バスや乗用車、そしてハイヤーで、押し寄せてきたのである。いまや遅しと給餌が始まるのを待っている。皆さん、数百ミリもの望遠カメラを構えている。バカチョンとデジカメでは恥ずかしい位だ。

4 鶴の体内時計は正確！

2 時近くになると不思議なことに、多分鶴見台の方向からであろう、3 羽また 5 羽と夫婦と子供であろうか、連れ立って飛来し、給餌場近くに滑空して着地する。前から餌を啄んでいた鶴が数十羽、飛来した鶴は概ねそれと同数。警戒心旺盛な丹頂鶴があれ程集まるのだから、冬に餌を見つけるのは困難なのだろう。それにしても、毎日のこととはいえ、鶴はどうして給餌時間を知り得るのだろう。余程正確な体内時計を持っているとしか考えられない。

5 食欲旺盛な鶴達

給餌の小母さんが給餌場を離れても、警戒心旺盛な鶴は近寄ってこない。餌はデントコーンだが、一日の給餌量はサンクチュアリでは 120kg にもなるという。特別天然記念物に指定されており、餌のトウモロコシは国の予算で支給されている。給餌というのは野生動物に対しては本来実施すべきではないのだろうが、丹頂鶴の場合は絶滅を防ぐための止むを得ざる措置と解すべきだろう。

